

田原さんを偲ぶ——追悼・田原音和会員——

安 原 茂

村研年報編集委員をお願いしていた田原さん（私はこのようにしか呼びようがない）とは、村研で長いおつきあいであった。いつ

田原さんと識り合ったのか、いま思うとさだかではない。村研通信の復刻版でたしかめてみると、田原さんは村研通信第一号の会員名簿に東北の会員として、中村吉治、竹内利美、菅野正さんらとともに名前が紹介されている。村研草創期からの会員歴をうかがうことができる。村研には私も何かと早くからかかわっていたからどこかの大会で顔を合わせていたかもしれないが、はじめて二人が自覚的に接するようになったのは愛知県蒲郡でおこなわれた第八回大会の

ことであった。この大会で田原さんは「東北農村における地主制と政治体制」について報告され、私は新潟県吉川町の調査報告をさせて戴き、いずれも一九六一年刊の年報に掲載された。大会発表ということでは田原さんと私は村研同期生であったといえようか。おそらくそれから村研大会の都度顔を合せ、親しくしゃべり合ってきたのであった。

周知のように村研大会では合宿研究会の間に懇親会がある。田原さんは平素は白皙の、昔の美剣士を思わせる端正な面立ちで、その物言いも深湛、的確なものでこちらに下手な隙があればヤツと一太刀浴びせられそうな姿であったが、懇親会の席が深まるごとに、打って変わっておろろしく快活、闊達となり、田原さんより早く故人となつた山形大学の勝又さんと一緒に何時間も私に明るい物言いで論議をしけられ、いささかお神酒の入った私も劣らず応戦するなどのことをなつかしく想い出す。

共同体論について田原さんは村研通信三〇号に「感想」を投稿しておられるが、この問題提起は村研のなかで必ずしも十分につめた形で検討されてこなかったことも思い出され、くやまれることである。

フランス留学の後であつたか、田原さんから著書『歴史のなかの社会学』を恵送戴いたが、その〈あとがき〉のなかで〈社会学といふ学問の認識論的な吟味〉の必要に閑説しておられるが、定評ある『社会分業論』の訳者である田原さんは、農村社会の実証研究を重ねながら（その成果のひとつが共著の『東北農民の思想と行動』であろう）、社会学理論との架橋をもつねに考えておられたのである。おそらく〈日本農村社会学〉の〈社会認識論的な吟味〉は田原さ

んのこれからの大好きな宿題であったと思われるが、その業の半ばにして田原さんはたおれた（との思いが深い）のは、田原さんにとっても、私たち村研会員にとっても口惜しい限りである。

田原さんの農村調査のフィールドのひとつは庄内農村で、菅野正、細谷昂両会員との共同の仕事としてまとめられているが、仄聞するところによると、この三人は調査行の車中でつきることなく論議し合っていたとうかがう。田原さんのデュルケム、菅野さんのウェーバー、細谷さんのマルクスなどと考えてみると、旅行中の論議は田原さんにとってまた楽しいひとときであつたと推量される。その点では良き共同研究者に恵まれた田原さんのお仕事は辛いながらも心楽しいものであつたろうと微笑まれるのだが、それにしても、社会学的認識論展開の途次にあつた急逝は惜しまれて余りあることである。田原さんの御冥福を祈るばかりである。

（成蹊大学）